

アンコール・ワット紀行

善光寺海外留学僧派遣育英会
常任理事 佐藤 俊 明

プノンペンまで

バンコクのエメラルド寺院にアンコール・ワットの大きな模型がある。拝観の都度、眺めたり、フィルムにおさめたりして、「一度はいつてみたいものだ」と、思いをつのらせていたが、カンボジアが内戦続きでは、と、半ば諦めていた。ところが昨年春ごろから、かすかな光がさし込むようになって来た。

善光寺海外留学僧派遣育英会の顧問、上智大学教授石沢良昭先生は、アジア文化研究所の所長であり、アジアの文化遺産の保存修復指導に当っておられる世界的権威だが、昨春、カンボジア政府との折衝と現地指導のため出かけておられた際、政府招へいの形で、育英会理事長の方丈さんと常任理事の私に、ビザと日程を用意してくださいだったので、「これは有難い」と期待に胸をふくらませていたところ、半月ほど前になって、「ホテルが都合つかなくなったので八月

に延期してほしい」との連絡がはいった。八月といえど私のところはお盆の月で忙しいので、惜しいことではあったが結局沙汰止みとなってしまった。

「アンコール・ワットというんだから、そのうち、アンコールがかかるだろう」と思っていたら、案の定、昨年十月パリーの和平会議で合意が成立し、カンボジアにようやく平和が訪れ、観光ビザで簡単にゆけるようになった。

カンボジアは、五月から十月までが雨季、十一月から四月までが乾季で、雨季明けの年末年始のころが旅行の適期なのだが、寺はこの時期は忙しいので、動くとなるとどうしても彼岸明けになる。そこで暑いのは覚悟のうえで四月二日出発と相成った。

バンコクに一泊して翌朝早々プノンペン入りしたが、エアポート・ホテルはこの点乗り継ぎにたいへん便利である。空港ビルから廊下を通

ってゆけるので時間のロスがない。フライトは六時だったが、ホテルで朝食を済ませることができた。

飛行機は三十分遅れて離陸し、八時プノンペンのポチエントン空港に着いた。

何しろカンボジアはいま世界の注目を集めている国なので、半年前のミャンマー行きの時とは打って違って飛行機はフォッカー一〇〇の新車ならぬピカピカの新機で、「これは幸先がいいぞ」と意気込んでいたら、とんだハプニングに見舞われた。というのは積込んだスーツケースが到着しないのである。実は旅行案内には、「このごろ報道関係者の入国が多く、重量器材の積み込みが多いので、荷物は一日二日遅れることもあるから、機内持込みだけにしたほうがいい」と書いてあった。高を括ったのがいけなかった。おかげで三日間、着のみ着のまままで過ごさねばならなかった。

飛行機から降りて、歩いて待合室に足を運ぶ。気温四十度というのにクーラーもない狭い待合室に大勢の人がごった返し。どこに何の窓口があつて、どんな風に入国処理が進められているのか皆目見当もつかず、まことに頼りないことおびただしい。そんな状況の中で、笑顔で迎えてくれた小柄な若い日本女性、夫君とともに旅行社を営む谷川さんのきびきびした活動はまさに一服の清涼剤だった。のんびりかまえているこの国の人々の中にあつて、谷川さんが目立つのは当然、あとで聞いた夫君の話では「彼女はテレビでも紹介されました」とのこと。

プノンペンのプノンとは山とか丘の意で、ペンは夫人の名で、プノンペンとはペン夫人の丘という意味だとか、何やらロマンチックな感じがしないでもない。その名にふさわしく、フランス人の造つたこの街は、道幅が広く、並木がこもり茂り、色とりどりの花が綻び、まことに

プノンペン（ホテルから）



王宮 (プノンペン)



清楚な感じがする。方丈さんは二十五年前に来たことがあるそうで、そのときは実にきれいだつたという。その後二十年にわたる戦乱が街の美観をすっかりこわしたわけだが、それにも美しい街だ。この美しい街の中心部を通つてホテル・カンボジアーナに着く。

このホテルは昨年経営者が代つたばかりとか。戦乱続きでは経営も思うに任せなかつたにちがいない。それにしてもいまひと息がなばつておれば、平和が到来し、観光客が押し寄せ、国連の機関が入つてきたものを。前の経営者には気の毒だが、今の経営者はまさに幸運児だ。この新しい経営者のもと、このホテルは平和と繁栄のシンボルのようなもので、このホテルをバックにして写真を撮ることがはやっていふることとて、写真屋がたむろしている。

ホテルの駐車場には、クルマの横つ腹にUNと大書きした白色のジープが数台とまつている。

「国連カンボジア暫定行政機構（UNTAC）」か、その傘下での「平和維持軍（PKF）」のクルマであろう。これらをバックにすればたしかに絵になる。

チェック・インして、ウナロム寺に洪井修師を訪ねた。

ウナロム寺は王宮の近くにあり、カンボジア仏教の総本山格の名刹であり、ポル・ポト時代に壊わされなかつた代りに、壊された小学校がこの寺の建物を教室として使っており、大勢の子供たちでにぎわっていた。

活躍する日本人僧

洪井修師は昭和六三年、バンコクのワット・パクナムに派遣された第四期留学僧だが、ワット・パクナムの修行を終えてカンボジア各地を遊行し、心に期するところがあり、一旦ワット・パクナムに戻り、三年前よりこの寺に居を移し、

ポルポト時代に虐殺された人々を、その虐殺現場に足を運んで供養を手向けるとともに、この国の人々に日本語を教えているのである。

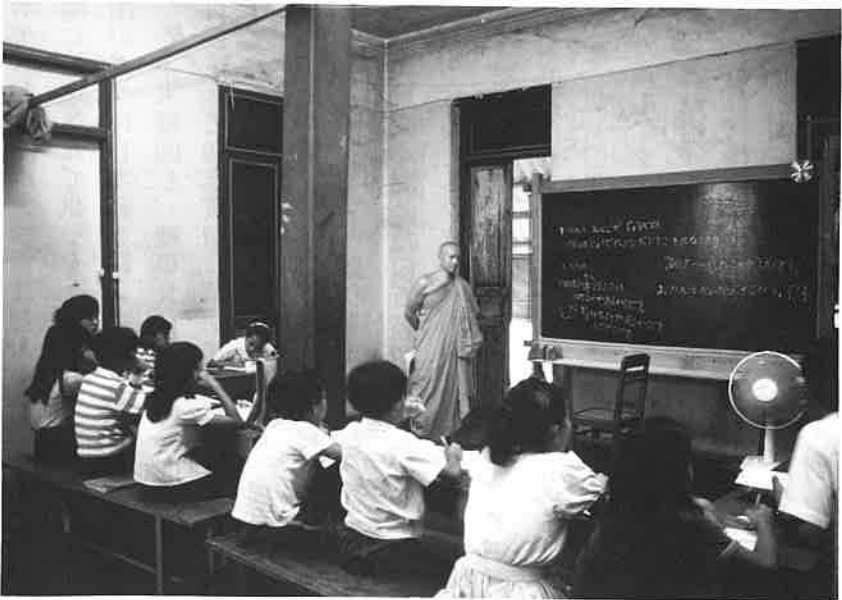
昨年末帰国し、理事長に一部始終を報告し、再び戻って初志貫徹に精進する旨を誓った。黒田理事長、この奇特の浄行に感銘し、理事会に諮り、彼を第二次派遣生に採用した。渋井師また大いに力を得、所要の準備をととのえ、二月ウナロム寺に戻ったのであった。

長年にわたるフランスの植民地支配から脱却して一九五三年（昭和二八年）カンボジア王国は独立し、過去の栄光を取り戻すかにみえた。ところが七〇年（昭和四五年）、シアヌーク元首が外遊中にクーデターが起きて、ロン・ノル親米反共政府が成立した。しかし五年後には政権が奪われ、代って赤色クメール・ポル・ポト派が政権を掌握した。ポル・ポトは嚴重な鎖国体制のもとで、都市廃絶、貨幣廃止、宗教や文化

活動の禁圧、公共サービス一切の停止といった異常な政策を強行し、全国民を刑務所同然のサハコー（人民公社）に閉じ込め、知識人や僧侶の過半数を含む男女三百万人、実に国民総人口の三分の一を虐殺している。

市内のどまん中にある、高校の校舎を転用した刑務所に案内してもらったが、虐殺されたおびただしい数の人々の写真、虐殺に使われた用具、虐殺シーンを描いた数枚の絵、子供のしゃれこうべをびっしりならべた壁面など、二〇世紀の今日、果してこのようなことがおこなわれたのかと、われとわが眼を疑うほど、身の毛もよだつ思いだった。

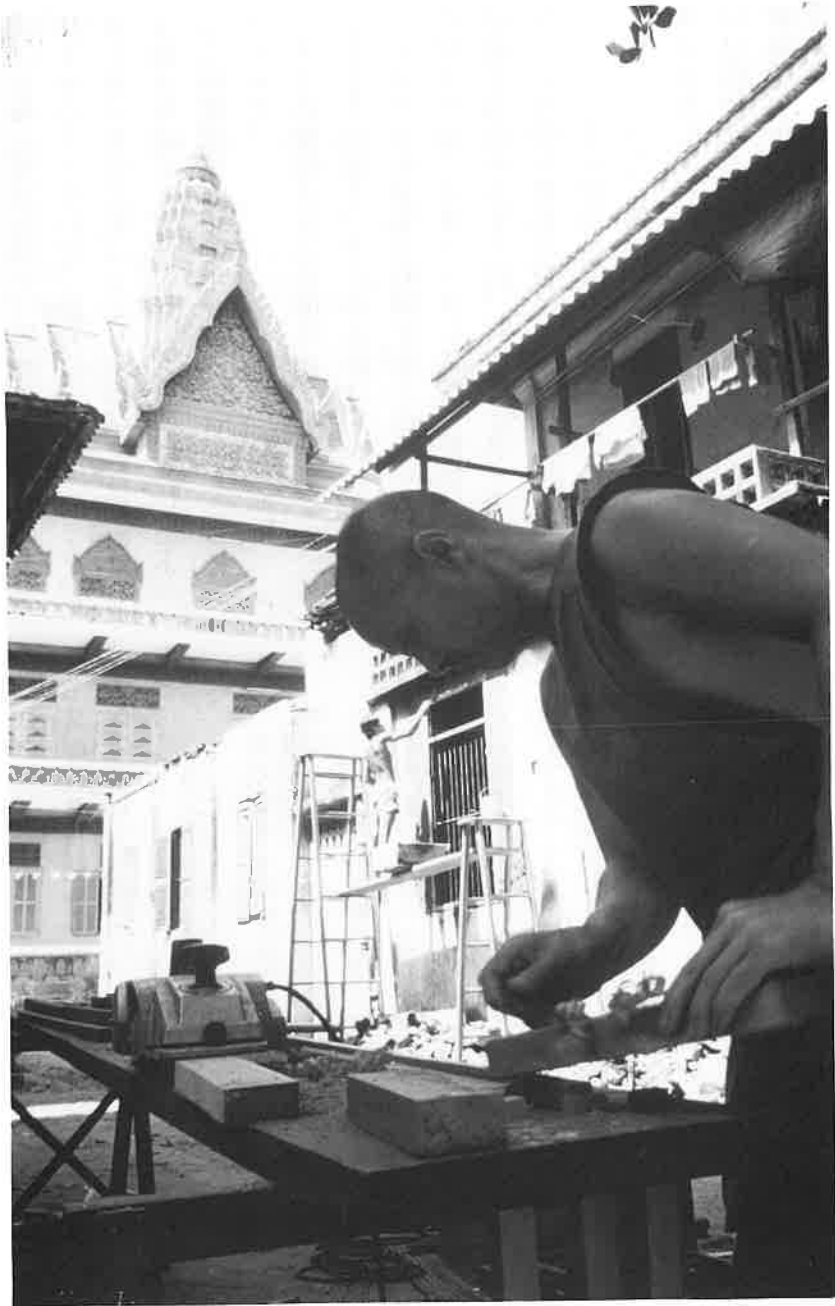
諸処方々でおこなわれた虐殺の現場にはいままなお人骨が山積みになっているという。渋井師はその現場に足を運んで供養しているのだが、いろんな制約があつてなかなか思うにまかせず、まだ十カ所ほど廻つたに過ぎないという。



日本語教室

彼はこのはかどらない行脚の間に考えさせられた。「カンボジアの復興のため日本僧として何をなすべきか」と。そこで気付いたことは、この国には日本語の本もなければ、日本語を教える教師もないということだった。そこで彼は早速日本からカンボジア語、日本語の本を取り寄せ、手づくりで教科書をつくり、それを人数分だけコピーして製本した。日本国内であればさほどのことでもあるまいが、コピー機器はも議論のこと、鉛筆一本の消耗品にいたるまでバンコクに買い出しにゆかねばならなかった。その労力とその経費、これは私たちの想像以上のものである。さいわい彼はタフで労をいとわないし、また、法輪転ずるところ、少額ながらも有志の喜捨もあり、一步一步前進を続けている。彼の居住する庫裡は二階建ての大きな建物なので、教室を開くだけのゆとりはあるが、机、椅子はつくらねばならなかった。さいわい彼は

大工仕事に精出す波井師



大工仕事も得意なので、現地の大工を督励して何とかつくっていた。訪ねたとき、ベランダで話し合ったのだが、「ここも屋根があれば雨季でも使えるので」と、且下庇をおろす作業中で、「この乾季中には仕上げなくては！」と張り切っていた。

タイの僧院よりこの国のほうが彼には合っているように思う。タイの仏教はすっかり整っているので自由裁量の範囲が限られている。ところがこの国ではボル・ポト時代、僧侶の多くは虐殺か還俗かさせられ、解放二年後（一九八一年）の全国の僧侶の数は二千人に過ぎなかったという。それが年々増え続けて昨年には二万一千人となった。仏教国としてやらねばならぬ仕事は山積している。まさに彼にとつては打って付けの時であり処である。いまプノンペン仏教研究所の再興を望む声があがっており、これら再興には日本仏教界の強力な援助が望まれてい

るといふ。そうなるとその面でも彼に大きな期待が寄せられてくるのであろう。渋井師の健闘を期待してやまない。

カンボジアはいま

夕方ホテルに帰ると、ホテルの前の路上に大勢の人々がバイクにまたがって勢揃いしている。ガイドの説明では、どこへゆくあてもない人たちとか。買い立てのバイクで夕涼みということなのか。

「国連景気といわれて、まずふえたのがバイクですよ」とは渋井師の言。「なるほど」と思った。この国の通貨はリエル。百円が五〇〇リエルだった。二万円両替えしたら一センチほどの札束が渡された。一〇万リエルである。この札束を見て私はふと思ひ出した。第二次世界大戦末期のころ、私は中国にいたが、その頃日本円一八〇円が中国元千元だった。あるとき中国人

の知人宅を訪れ、雑談の途中、「メモ用紙頂戴」といったら、彼は十元紙幣を出した。「メモ用紙ですよ」というと、彼曰く「これ、紙より安いよ」と。これにはあぜんとしたが、リエルがそんな風にならないことを祈ってやまない。

国連関係者が強いドルを持ち込む。弱いリエルはますます弱くなり、一般国民生活はいよいよ苦しくなる。背に腹はかえられず、役人さえ、援助物資を横流ししているという。

四月十一日付の「朝日新聞」の「透視鏡」欄に「カンボジアに依存体質・目立たぬ『自力復興』への意気」と題する大和修氏の一文が載っていたが、残念ながら私も感と同じうするものである。

いま難民がタイの収容所から続々郷里に送り帰されている。続々とは書いたが、実は日に千人を帰すという予定は空文にひとしく、また一週間だけという仮りの宿に、半月経っても立ち

退かぬ者も多いという。

十数年間収容所生活をして生産手段から離れた彼ら、しかも無数に仕かけられた地雷原のそばで、果して定住できるのであるか。何割かは職を求めて都市に流れ込むのではないだろうか。その混乱は予想以上に大きいものかと思ふ。

トンレ・サップ

ホテルのうしろはメコン河、トンレ・サップ河の合流するところである。合流地点を見ればまぎれもなく河だが、下流を望見するとまさに大洋である。雨季には水位が八メートルも上昇するというのだから、それはまた壮大な眺めであろう。さすがは全長四、二〇〇キロ、四方国を縦断して南シナ海に注ぐ大河である。

インド文明が、インダス、ガンジスの両大河によって育くまれたように、メコンの流れはカ

ンボジア文化の母なる河であることが感取できる。

この国のもっとも栄えたのは九世紀から十四世紀にかけてのクメール王国(アンコール王朝)時代であり、その最盛期の版図はいまよりはるかに大きかった。

アンコール王朝は、いまのカンボジアの北西部、シエムレアップ州とその周辺部に、アンコール・トムその他いくつかの都城を築き、アンコール・ワットはじめ大小約千三百の石造建築を残した。それらは、建築面でも美術面でも、遺跡の中で群を抜いており、世界の注目を浴びていることは周知の事である。

プノンペンから飛行機でトンレ・サップ河の流れを上流に辿って飛ぶと、トンレ・サップ湖が見えてくる。まるで海のような大きな湖だが、雨季には、水嵩を増したトンレ・サップ河が逆流して湖に注ぎ込み、湖は三倍以上の大きさ、

メコン河とトンレ・サップ河の合流地点 (ホテルの窓から)



一万平方キロにもなるといふ。そのため湖の周囲の森林地帯は毎年雨季になると水びたしになり、乾季になると肥沃な土壌を残して水は去つてゆくので、冠水林は絶好の天然養魚場になるという。農業もまた然り、あくせく働らかなくても、タネを蒔きさえすれば、肥料なしで作物はとれる。果樹は年々たわわに実をつけてくれる。この恵まれた自然環境がアンコールの建造物を生み出す経済的基盤だったのでなからうか。

このトンレ・サップ湖の北西部にシエムレアップ市があり、ここの空港まで一時間弱のフライトである。双発のプロペラ機が、日曜は二便、週日は一便往復している。

飛行機といえば座席指定がきまりのようなのだが、ここにはそれがなく、定員オーバーで飛んでいる。コック・ピットと客室の間の広場や尾翼前の荷物室に藤椅子が置いてあるからこ

れは常習のことのようだ。

シエムレアップの空港に降り立ったとき、いまの日本ではどんな片田舎に行つても、こんなに静かな、のどかな風景に接することはできないであらうと思つた。草や樹は美しい花を咲かせ、平和そのものの感じだった。

しかし、ホテルに着くと、UNのジープ数台にまじつて奇妙な形のクルマが目に入った。聞けば地雷処理のクルマだということで、少々の地雷にはびくともしない鋼鉄のかたまりのようなクルマで、その重量を支えるに足る橋梁がないので、行動は相当制約されているということだが、これは周囲ののどかな風景とは全くちがはぐな感じのもので、アンコールの遺跡を取りまく状況のきびしさを見せつけられたような気がした。

アンコール・ワット

シルムレアップのホテルからクルマで二十分も走ると、アンコール・ワットの正面に続く表
(西) 参道に達する。

アンコール・ワットとは、クメール語で「寺院のある町」という意味だという。

アンコール・ワットを紹介した文献は数多くあるが、石沢良昭先生の『甦える文化遺産 アンコール・ワット』(日本テレビ発行)によって述べることにする。以下、括弧内はこの本の引用文である。

「幅一九〇メートルもの広大な環濠で囲まれた寺院は、湖の中に浮ぶ島のような外観を呈していた」

とあるが、残念ながら私の見た限りの写真集には、水をたたえた環濠の写真が見当らなかつた。それだけに水のある環濠はどんなに美しい

だろうと想像を逞しうしていたのだが、プノンベンのホテル・カンボジアーナのロビーに、アンコールワットの建物をバックにした環濠で大勢の女性が水浴している姿を描いた大きな額が掲げてあったのを見て、「ああ、なるほど」と合点がいった。

カンボジア人は非常にきれいで日に二回水浴するという。そして水浴場は社交の場でもあり、夕日の沈むころ、一日の仕事を終えて水浴場に集まり、水中に入って体を洗い、一日の出来事をたのしそくに語り合うというが、まさにその雰囲気を感じられる絵である。

「アンコール・ワットを見た者は、それが途方もなく大きな規模であることに驚き、整然たるプランをもつ非常に調和のとれた建物であることに感動を覚えずにいられない。寺院の外周を幅広い環濠(一・三・五×一・四)で囲まれ、周壁で区切られた境内には、さらに盛土によつ

て高くなった基礎上に土台石を敷設し、その上に三重の回廊を造り、中央部に本殿が築かれた。中心に近づくほど高くなり、つまりは天界に近づくよう考えられた建築構造である。

参道は四方にまっすぐにのびていた。東参道は土塁が、南北には参道跡が残っているだけだが、西参道は石畳で舗装され、両側にナーガ(大蛇)の欄干が設けられている。西参道入口から中央神殿まで七〇〇メートル、大人の足でさえずりに三〇分はかかる。西参道をはさんでそれぞれ一対づつの聖池と経蔵がある」

気温四十度のカンカン照りの中を、道幅一二メートルの石の参道を歩くのはらくではなかったが、ふと気がつくとき、第一回廊の屋根が白く変色して調和をくずしている。聞けば八六年(昭和六一年)からのインド作業班の薬物による洗浄で変色したものだという。

一九八六年(昭和六一年)より、カンボジア・

インド両国政府間協定にもとずき、翌八七年より、インドが遺跡の保存修復作業を実施しているが、これにはいくつかの問題点が指摘されている。「例えば遺跡の主な用材となっている、砂岩は損壊しやすく、その取り扱い方の問題、原石材保護を念頭においた作業方法の再検討、滞水の雨水に対する排水の方法、薬剤クリーニングの方法と効果、作業の熟練度と薬剤使用に当って健康管理など基本的な技術上の問題を含めて、今後さらに十分な検討をしていく必要性がある。

また、これまでのフランス極東学院が実施してきた修復保守作業資料を、インド専門家チームがまったく参照していない点は憂慮すべきことである。」

まことに惜しいことをしたものだと思いがら歩いていると、五メートル高くなっているテラスに達した。さらに数段登ると第一回廊とな

る。この回廊（二百坪×百八十坪）の内壁には
叙事詩や歴史をテーマにした壮大な絵物語のレ
リーフがある。この第一回廊を過ぎると次は十
字中回廊に入る。この一角にプリア・ポアン（千
本仏）が安置してある。ポル・ポトに破壊され
た仏像の姿は痛々しい。

この寺は、一二世紀の前半、スールヤヴァル
マン二世世によって建立されたヒンズー系の墳墓
寺院なのだが一五世紀にアンコールの都城が放
棄されたのちは上座部仏教の寺院となって今日
に及んでいる。仏像があるのはそのためである。
さて、この千体仏の安置してある近くの柱に
墨で書かれた日本人の筆跡がある。長い年月を
経て判読しがたくなっているものをポル・ポト
派がさらに横なぐりに消しているが、朱印船買
易の盛んだった一七世紀に日本人がこの寺に参
詣しており、十四カ所に墨書の跡が見つかって
いるという。例えば、森本右近太夫一房（加藤

レリーフ・女神（アンコール・ワット）



清正の旧臣の子供)は、寛永九年(一六三二年)に父の菩提を弔うために四体の仏像を奉納したと記しており、彼らはここをインドの祇園精舎だと誤解していたらしい。当時日本で作出された祇園精舎の絵図面にはアンコール・ワットが描かれている。

十字中回廊を経て、また数段登ると第二回廊(百段×百十五段)である。ここには華麗な女神たちの群舞が浮き彫りされている。

このあたりに来たとき、十二時少々前だった。インドの作業班に備われたのであろうこの地方の女性たちは、石畳の上に横たわって昼寝している。これは現前に見る華麗なる女身たちの群舞の休憩の姿。

第二回廊の中庭を抜けると眼前に急傾斜の階段が迫り、荘厳な五基の堂塔をいただく第三回廊へと登ってゆく。

「アンコール・ワットの中心は、整然と五点

形「三」に配置された五基の堂塔である。ひときわ高い中央堂塔とそれを囲む四基の堂塔は第三回廊によって各々が結ばれており、参詣者たちは第二回廊の内庭から、高さ一三メートルの急な階段を登って第三回廊へと達する。

この五基の堂塔こそ、宇宙世界の中心を模したものであった。スールヤヴァルマン二世は王権を神格化し、その独特の宇宙観を具現するために、アンコール・ワットを建立したといわれる。中央の堂塔は、まさに世界の中心山である、神々が棲むメール山(須弥山)を象徴し、周壁は雄大なヒマラヤ連峰を、環濠は無限の大洋をそれぞれ意味していた。

五基の中でもっとも高い六五メートルの中央堂塔はいつもヴィシュヌ神が降臨し、王と神が合致する場所と考えられ、特別な神像の祭式が執り行われていた」

階段は急で、一部がセメントで補修されてお



最頂部にあるブツダ像（アンコール・ワット）

り、鉄製の階段もあったが、私にはもう登る余力がなかったので石畳に腰をおろして、華麗なる女性たちの昼寝姿を拝んでいた。

以上でアンコール・ワットののおおよその姿が頭に描かれたことかと思う。

このアンコール・ワットは前出のスールヤヴァルマン二世が、一一一三年に王位につくとすぐ建設に着手し、三十年の歳月をかけて完成したものであり、ヴァイシュヌ神に捧げる祠であると同時に王自身の墳墓として建立したものとされる。

アンコールの他の遺跡がほとんど東向きなのにこの寺だけが西向きなのはそのためといわれる。

アンコール・トム

日本では、アンコール遺跡即アンコール・ワットであるかのような印象を受けるほどアンコ

ール・ワットだけが有名で、その他は陰に隠れてしまっているのだが、アンコール・ワットの表参道の前の道を左折して北に一キロ半ほど進むとアンコール・トムの南大門につく。

アンコールとは都、都市のことで、これはナガラからきているという。ナガラは町ということとで、お釈迦さま入寂の地はクシナガラ、このナガラがナコールになり、アンコールになったという。トムは「大きい」という意味なので、アンコール・トムは大都城のことで、クメール王国最大の王ジャヤバルマン七世が、十二世紀末から十三世紀初頭にかけて造営した大都城である。

「都城建設プランは一一七七年のチャンバ軍来襲の事件の教訓から、王都を出来るだけ要塞化しようと考えていたようであり、それ故に「輝ける王都」アンコール・トムに高い城壁が構築されたのである。それは大きな環濠とあわせる

南大門（アンコール・トム）



と二重の堅固な防壁となり、一辺が三キロメートルの正方形を形づくり、巨大な五つの大城門がその城壁の出入口となっている。その都城の中央部には、山岳型寺院バイヨンが建立され、仏陀を頂点に国内のあらゆる神々が合祀されている」

アンコール・トムは、人口二〇万人を数え、華僑はじめ多くの民族が居住した国際都市で、バイヨンをはじめとし、プーオン神殿、古王宮とその付属寺院ピヤナカ、象のテラス、癩王のテラスなどの有名な遺跡がある。

中でもバイヨンはアンコール・トムの中心、すなわち東西南北の各大門から一・五キロ半の処に位置する寺院で、岩石を山のように築きあげた壮大なものである。

仏教の篤信者であった大王は、もつとも深く信仰した観世音菩薩、ロケシユヴァラに自分の顔をミックスさせたのではないかといわれる巨

バイヨン（アンコール・トム）



大な四面像をそびえ立つ多くの塔に刻み込んでいる。観世音菩薩の面は全部で一九六面あり、また中心塔の高さは四五メートルに達するといふ。

九世紀から繁栄の道を歩んだクメール王朝は、ジャヤバルマン七世を最後に衰退を余儀なくされ、隣国シヤム（タイ）の侵攻などで遂に都城を放棄し、バサン（カンボジア中部）へ、そしてフノンペンへの遷都となり、旧領土の大部分は隣国のシヤムとベトナムに奪われるに至った。

こうしてアンコールの遺跡は密林の奥深くに忘れ去られるのである。

緊急修復を期待する

カンボジアを保護国としていたフランスはアンコール遺跡保存事務所を創設し、遺跡の保存、

管理、修復、調査研究などの仕事を展開して来た。そしてカンボジア独立後はユネスコがその業務を引き継いで来たが、七〇年来の内戦により、すべては中断された。

八六年（昭和六二年）より、おこなわれた、インド遺跡保存修復作業については前述のとおりである。

さいわい日本政府は今春、アンコール・ワット修復作戦を本格的に支援することとなり、緊急措置として新たに百万ドルをユネスコの基金を通じて拠出することを表明し、さらにアンコール・ワット修復のための国際会議を九月に東京でおこなうことを準備しているという。

人類共通の文化遺産と高く評価されているアンコール遺跡群が緊急の修復措置により一日も早く甦ることを念ずるとともに石沢先生はじめ日本スタッフのご健闘を祈念してペンを擱く。